

→山城古道に、橘諸兄と藤原仲麻呂の対立を見る

2019. 3. 10 (日) カルチャーウォーキング

関西文学散歩 第 543 回 参加報告

大仏師 国中公麻呂、大鑄師 高市真国、高市真磨、鑄師 柿本男玉、大工 猪名部百世、小工 益田縄手ら 6 名の名は、毎年 2 月に東大寺二月堂で行われる修二会の折、東大寺造営に功があった者の名を奉読する「過去帳」によって披露される。造頭から千数百年経った今でも彼らは東大寺造営の功勞者として尊崇されているのである。だが造仏に直接た

ずさわった者の中からは多くの廢疾者^{はいしつ}が出た。造仏最後の段階に行く鍍金には水銀を使う。仏師は蒸発する水銀ガスを吸い、中枢神経や呼吸器を冒される。目や歯も悪くした。そのうえ、大仏開眼供養を前にして、仲麻呂が光明皇太后に授けた策略で、天平 16 年 2 月 12 日に發布した放賤の詔を廢止すると紫微中台が宣し、彼らは再び元の雑戸、私奴婢に戻った。

天平勝宝 4 年 4 月 9 日、大仏開眼会は樂の音とともに盛大にとりおこなわれた。盧舎那仏造頭に直接かかわりながら、病を得たことを理由に山背国の主家に帰されていく秦氏の私奴婢たちの姿はあわれである。彼らの、良民として与えられた土地を耕しながら静かに暮すという夢は儚く消えた。病も得て失意のもと、彼らは又もや賤民として生きなければならぬ。お上の都合で民が翻弄されるのは今も昔も変わらないのである。

コースは、まず井堤寺(圓堤寺・井出寺)跡である。この辺りを本領とした橘氏の氏寺だったという。跡地とされる一角に東屋が建てられ、説明板があった。井手町の民家の間にひっそりと佇むのは六角井戸。井手左大臣・橘諸兄の別荘にあったものだという、聖武天皇の行



橘諸兄旧跡



橘諸兄旧跡へ向う道

幸があったので玉井頓宮跡ともされている。『万葉集』卷 19-4270 の諸兄の歌「葎^{むぐら}はふ賤しきやども大君し座さむと知らば玉敷かましを」(屋根に雑草が広がるみすぼらしい家に大君が来られると知っていましたが玉石を敷いておくのでしたのに)の歌碑も井戸の横に建てられていた。そして東の山麓の山背古道に近いところに橘諸兄旧址と彫られた墓碑があり、まちづくりセンター椿坂、小野小町塚を経て伸びる古道は、殆ど舗装がされてい



小野小町塚

たが、玉津岡神社からの短い区間は竹やぶの間を
通って趣きがあった。

最後に訪れた高神社は野猿が出るとのことで、
参拝は石段下からとなった。しかし勇気のある
男性が3人、登っていかれた。猿に遭遇しない
かと心配しつつ、皆は山城多賀駅へと向い、京
都方面と大阪方面へと帰路についた。

後日談ではあるが、石段上に幸い猿はいな
かったそうで無事、帰宅されたそうで安心い
たしました。

<報告：田原由美子>